慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「新国際主義」を読む : Clark Foreman, The New Internationalism. Norton ＆ Co. New York 1934
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.1 (1935. 1) ,p.99- 106
JaLC DOI	10.14991/001.19350101-0099
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350101-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「新國際主義」を讀む

——Clark Foreman, The New Internationalism. Norton & Co. New York. 1934——

加田哲二

一

あらゆる意味における國際主義が凋落したといはれる今日において、新國際主義と稱する著作の現はれたことは、一の興味である。その結論が如何なるものであらうとも、一應、この表題に注意を惹かれることは、當然といはねばならぬ。勿論この書の全體は、一の新國際主義の提唱といふよりも寧ろ世界現象の新解釋としての國際主義を論じたものであり、從つて、國際主義に對する新方法または新政策が、この書によつて提供されたものではないが、この意味においても、この書に注意を向けることは、一應當然である。

著者その人については、筆者は何ごとも知らぬ。たゞ同書の廣告によると著者ドクトル・フォアマンは一九三一年以來ジュネーヴ國際關係研究學校のアメリカ委員の一人であつて、本年(一九三四年)アメリカ合衆國に歸來し、內務省に勤務してゐる人であるといふ。

二

彼は、國際主義（インタアナショナリズム）といふ言葉が、英語として用ゐられたのは、エム・エム・グラント嬢の一八七七年に刊行された小説においてであり、且つ「インタアナショナル」なる言葉は、一七八〇年ジェレミー・ベンタムによつて使用されたことを、ニュー・オックスフォード・辭典によつて記してゐる。而して、インタアナショナリズムの意味を次のやうに規定してゐる。

「インタアナショナリズムは、今日その全意義において、世界の諸國民による政治的・經濟的・文化的協働の一組織である。これには種々の組織があるし、また協働についても、その強度に強弱があり得る、しかし、普遍的なることが、その現代的意義の本質的部分である。この意味は、世界の諸國民の相互依存がある程度において、不可避と認められるゝに至つた第十八世紀終末に始まるのである。そのとき以來、世界は一の經濟的全體と考へらるゝに至つたのである。」（同書一三頁）

かくの如き意味におけるインタアナショナリズムが理解せらるゝためには、これに對立する概念にあるナショナリズムを一通り理解して置く必要があるといふのである。この點は本文の筆者も同感であつて、既に拙著「國民主義と國際主義」の中において、これを企てたことがある。フォアマンに從へば、中世紀の社會において、諸國の協働に顯著な作用をなしたものは、キリスト教會、殊にローマ・カトリック教會であつた。これに對して、諸國の經濟的發展は、都市中心の領域經濟から一國經濟、即ち國民經濟が成立した。これは一般經濟史の教へるところであるが、この過程において、中世的ローカリズムから近代的國民主義が誕生したのである。著者は近代國民的國家の成立をエリザベス女王治下の英國に求めてゐる。この時代に產業統制の組織が樹立せられ、國民的自給自足が奬勵せられた。この產業統制の組織がマアカンティリズムと稱せらるゝものであり、國民的計畫經濟（National planned economy）に對する最初の企圖である。英國はこのマアカンティリズム――國民主義經濟政策――によつて、その產業を發展せしめ、他の諸國もこの政策に追從したのである。しかるに、この政策の英國における成功は、產業の一層の發展に對して、一の桎梏と化するに至つたのである。第十八世紀におけるマニュファクチュアの發展とこれに伴ふ商業の發展は、これであつた。かくの如き英本國における發展に伴ひ、この發展のために犧牲にせられてゐた植民地においても、產業の發展が行はれた。北米十三洲の獨立戰爭（一七七六年）はかくの如くにして行はれ、その母國からの獨立が宣言せられた。この桎梏と化したマアカンティリズムに對して理論的反擊を加へたものは、アダム・スミスであつた。彼は、マアカンティリズムの國民主義干涉政策に對して、自由主義を主張した。これとともに、實際經濟生活の上においては、生產技術の發展が行はれ、所謂產業革命の時代に入り、英國は「世界の工場」となり、かくて、國民主義干涉政策は順次撤廢せらるゝに至つたのである。これに理論的基礎付けをなしたものは、スミス、マルサス、リカアドオである。自由放任の理論は完成せられた。而して、國內における自由放任の理論は、國際間における自由貿易の理論である。この理論は國際分業論即ち比較生產費說にその根據を置くものである。かくて、貿易の障壁を取除いて、全世界における自由貿易を樹立しやうとする一八四〇年代における英政府の計畫運動とこれに對するナポレオン三世の讃同となつた。この理論と運動との結實が即ち「資本家的國際主義」（Capitalist internationalism）である。

資本家的生產とともに興隆し來つたものは、プロレタリアートである。この階級は、初期資本家制度の下における窮乏に惱まされたのであつて、その狀態の改善、または彼等の苦痛を受けてゐる全制度の變革を目的とする運動を起したのであるが、彼等はこの運動において、當時の國際的資本主義の影響を受けて、また國際的であつた。社

會主義的國際主義（The Socialist internationalism）が形成されたのである。この理論家は、マルクスであつた。「社會主義は、資本主義と同じやうに國際的である。しかしながら、ブルジョアジーの國際主義は、常に國民的資本主義の相互競爭によつて、失敗するのであるが、プロレタリアートの國際主義は、その住居地または民族性の如何に拘らず、すべての勞働者の利益の活動的な協力によつて、常に繁榮し、有力となるのである。」（ステクロフ、第一インタアナシヨナルの歴史）このステクロフのいふやうに社會主義的國際主義は繁榮したか。決してさうではなかつた。第一、第二、第三の勞働者インタアナシヨナルはこの豫言通りには行かなかつたのである。

三

資本主義インタアナシヨナルもその通りである。第十九世紀中葉において、實現しやうとした資本主義インタアナシヨナルの政策としての自由貿易主義は、當時尚ほ幼若産業を有してゐた諸國の利益ではなかつた。それは世界の工場としての英國を利益したのみであつた。從つて、英國の工業製品の輸入を欲せず、自國の工業を發展せしめやうとする諸國の反抗に會つた。イギリスの自由貿易主義に讃同したナポレオン三世治下のフランスにおいても、この政策に對しての反對は顯著であつた。當時幼若産業の發展を期してゐたドイツ並にアメリカはこれに反對した。ドイツはフリードリッヒ・リストにおいて、アメリカはチャールズ・ケリーにおいて、その國民主義經濟政策の理論家を持つてゐた。

幼若産業の保護政策は、自國の生産力を增大せしめ、擴大された生産力は、商品販路の擴大を要求する。第十九世紀後半の植民地獲得運動は、これに對する一の表徵である。經濟的帝國主義の時代は來たのである。帝國主義の時代は、先進國資本の後進國に對する投資を齎らすものであり、從つて、投資領域における獨占的地位を先進國は獲得せんとするのである。こゝにおいて、資本主義先進國間の世界市場分割の運動が起る。この市場分割運動における衝突の頂點が世界戰爭であり、先進帝國主義國としての英・獨の爭覇であつた。この世界戰爭への過程は一歩一歩資本主義的インタアナシヨナリズムからの退潮であつた。

歐洲大戰後は如何。歐洲大戰が一の帝國主義戰爭として理解されねばならぬと同樣に戰後の世界もその繼續として見るべきものである。ウイルソンの無併合、無賠償の講和條件は、その理想主義的言辭以外には、何ものをも殘さなかつた。講和以後の諸傾向は資本家的インタアナシヨナリズムにとつて、不利益の現象のみであつた。第一は多數の國家における金本位制の停止である。これまで、國際的價値標準として、貿易を圓滑ならしめてゐた金本位制は諸國において停止せられ、國際爲替は變轉極まりないものとなつた。第二は、ロシアの崩壞である。ロシアは共産主義者の革命のために、他の諸國から關係を斷絶せられた。ロシアは世界陸地の六分の一、人口一億六千萬、しかもその大部分が資本主義化されてゐないので、資本主義の販路としては、一の有力な市場である。これが資本主義の世界から切り離されてゐるのである。第三にドイツを始め、中央ヨーロッパ諸國の經濟的崩壞で、こゝにも資本主義は重要な市場を失つてゐる。第四に、ヨーロッパには民族自決の原則によつて、新興小國が多數出現し、各〻高度の關稅障壁を設定してゐる。これらの諸要件は資本主義的インタアナシヨナリズムの復活を不可能とするものである。資本主義インタアナシヨナルは崩壞した。

四

社會主義インタアナシヨナリズムは如何。第一インタアナシヨナルの成立以來、約八十年、國際社會主義運動の退潮今日よりも甚だしきはない。第一インタアナシヨナルは集權主義と分散主義の鬪爭の結果崩壞した。第二イン

ダアナシ■ナルは、ドイツ社會民主主義者の指導によるものであるが、これは、ドイツ社會民主主義運動の實相をそのまゝ再現してゐたといつてよい。ドイツ社會民主主義においては、その最初から改良主義と革命主義との對立があり、理論的には、常に革命主義が指導的地位を占めてゐたのであるが、實際政治運動上においては、改良主義の勢力が優勢であつた。第二インタアナシ■ナルも、決議宣言などは常に革命的言辭に充ちてゐたのであるが、その實踐がこれに伴はなかつた。一九二四年の各國社會黨の行動は、これらの革命的言辭を反古としたに過ぎない。

これに反對して革命的立場にあつた第三インタアナショナルは、マルクスの昔にかへらんとするものであり、一九一九年からの數年間において、革命の波が世界を襲つてゐた時代においては、インタアナショナリズムの旗を高く擧げたのであつた。しかしながら、一九二〇年代の前半の二三年において、ヨーロッパの革命化に失敗し、更らに支那における運動も、その指導通りにならないので、こゝに一國社會主義の主張に轉じたのである。スターリンの一國社會主義とトロッキイの永久革命論とが對立したが、スターリンの勝利に歸し、第一次五ケ年計畫を遂行し、更らに第二次五ケ年計畫に入つてゐる。このサウェート同盟の工業化のためには、隣接諸國との平和的關係を持續するを要するので、サウェート同盟の指導者はしばらく從來の世界革命論を棄てざるを得ないのである。こゝに世界革命から一國社會主義への轉向があり、更らに、極東における國際關係の緊張とヒットラア政權の成立は、サウェート同盟をして、親佛政策を採らしめ、親米政策に赴かしめたのである。近接諸國とは、不可侵條約を締結し、國際聯盟への加入問題さへ起つてゐる。かゝる情勢の下においては、世界革命を任務とする第三インタアナショナルも凋落せざるを得ない。第三インタアナシ■ナルの崩壞が云々せらるゝのは當然であり、社會主義インタアナシ■ナルは全般的に死滅したのである。

五

著者フォアマンはかくの如く、資本主義インタアナショナリズムも、社會主義インタアナショナリズムも共に死滅したといつてゐる。事實まさにさうである。著者はしからば、如何なるところにその新國際主義なるものを求めてゐるのか。フォアマンは世界大戰後の各國の傾向を國民主義に求めてゐる。殊にこの傾向は、世界大戰――世界恐慌を通じて激化されたとしてゐる。殊に、世界恐慌對策としての各國經濟政策は、彼の所謂國民計畫經濟である。大英帝國におけるオッタワ會議以後の英帝國領の經濟關係の緊密化、イタリーのファシズム經濟政策、ドイツのアウタルキー政策、日本の日滿ブロック經濟、サウェート同盟のゴスプラン、トルコの國民主義政策などをその代表的なものとして擧げてゐる。かゝる傾向と國際主義とが一致すると著者はいふのである。著者は、アウタルキー、即ち國民的自給自足が、生產力の進展によつて、到底成立し得ないことを主張する。この點は著者の論議を俟つまでもない。何等かの形態における各國の接觸が必要である。この接觸の新方法として、著者は貿易の國家管理を擧げるのである。貿易の制宛制、バーター・システムなどがこの新國際主義の表徵だといふのである。著者はこれを「政府間貿易」(Intergovernmental trade) と稱してゐる。この運用が新國際主義だといふのである。舊國際主義は各國における民族性または民族の獨立を無視した個人間の國際主義であつたが、いまや、國民計畫經濟を通じての、而して國民をその基礎に置くところの新國際主義が、形成せられつゝあるといふのである。筆者は、かくの如き傾向が世界經濟の上に現はれつゝあることを否定するものではない。たゞ彼はいふ國民計畫經濟の形成が、何故に新國際主義への形成を促すものであるかは、本書の通讀をもつてしては理解し得なかつた。國內における統制經濟と、國外に對するブロック經濟の形成は、新國際主義への出發點といふよりは、寧ろ帝國主義的對立の激化と見

るべきものと信ずる。かくの如き觀點からすれば、現時の經濟的傾向は新らしい戰爭への前夜であつて、國際主義への何等の徵候をも示してゐないものといはねばならぬ。著者は、この帝國主義の進展、新戰爭への展望については何等いふところがなく、直ちに新國際主義をこの傾向の中に見やうとするのは、少くとも無理であらうと思ふ。しかしながら、著者はインタアナショナリズムにおいて、資本主義的なものと、社會主義的なものとを對立せしめ、――これは筆者もかつて「國民主義と國際主義」の中で試みた――その發展崩壞の過程を手ぎはよく追究したことは、吾々に一讀の價値を認めしめるものであり、國民主義・國際主義の研究者にとつては、一の良參考書としてその書棚に加ふべきものであると信ずる。（定價一弗七十五仙）

一九三四・一二・一八稿

野間繁著「無産者救護制度體系」

小島榮次

「法の前には萬人平等なり」と云ふことは理論上では眞實である。萬人悉くその出生に依つて私權を享有し、身分の高低・財産の多寡・年齢の長幼等に依つて增減差等はない。然し乍ら實際上果してこの通りであるかといふに、決して然らざることは周知の事實である。主として訴訟上の費用を負擔する能力の缺除の爲めに、無産階級が法文上に明記された權利を實際に享受出來ぬ狀態にあることは、現在いづれの資本主義國に於いても大體同樣である。これに對して所謂訴訟救護或は法律扶助の事業が行はれて居るが、それが各國に於いて如何なる程度に實施され如何なる效果を擧げて居るか、又その將來はどうかといふことは、單に社會事業に關心を有する者のみならず社會問題に注目する一般人士の齊しく興味を有するところであらう。こゝに紹介する野間判事の著書「無産者救護制度體系」は、筆者の知る限り本邦に於いてこの方面の最初の體系的研究を提供するものである。

著者は現在東京地方裁判所判事の職に在り、昭和八年夏司法研究員として調査研究を命ぜられた結果、「無産者救護の社會的法律的考察」と題する報告を作製した。これは一二二二頁に達する厖大なる報告書で、本書はその拔抄であるがしかも猶菊判八二〇頁の大冊である。著者は本書の主要部分を大體に於いて（一）訴訟外に於ける無産者